

新世紀に囑望する言語学の若干の問題

— 私的な興味にまかせて拾い上げた4題断 —

田 原 薫

0. はじめに

本稿は特定のテーマについて深く追求したものではないので、ジャンルとしては論文でなく、将来誰かが私の提示する話題に興味を抱いて追求して下さることを淡く期待して、その緒(cue) 或いはヒントとして役立ちそうな話題を提供する随筆のようなものである。随筆では認めてもらえないので一応「研究ノート」として発表させて頂くが、そのようなテーマを私が独占して(いわば唾を付けておいて)将来論文に仕上げようと思っているわけではない。第一、古希も間近に迫った私にはもはや言語学の世界で私の「将来」を語ることは無意味になっており、早く足を洗って(?) 隠居したいと思っている。しかし新しい世紀が始まったことではあるし、前世紀の終末20年ほどは多少言語学に関わってきたので、この機会に、前世紀の言語学が積み残して解決を新世紀に委ねた若干の問題 — 言語哲学的な問題も含むが — を指摘してご参考に供したいと思う。

1. 句構造文法の力の限界について

1957年に *Syntactic Structures* が発表されて以来、40年以上にわたってチョムスキーは世界のカリスマ的言語学者と目されてきたが、72歳で新世紀を迎えた彼が20世紀に残した(或いは遺した)業績は?といま改めて総括すると、名声の華々しさに比べてその業績の実質的な貧困さに嫌でも気付かざるを得ない。彼は最初から意味や語用論上の問題には関心をもたず、ひたすら適格文を過不足なく生成する理論装置或いはソフトウェアの発見記述に全力を注いできたわけであるが、意味(の構築と理解)の問題を敵視していたわけではなく、言語形式の記述が成功裡に終わったら、次はそれと意味とを結びつけることを遠大な計画としてもっていたようである。つまり彼の言う、統語部門と意味(解釈)部門とのinterfaceであるLFというものを実体あるものにする計画である。

しかし、LFというものが仮に Chomsky[1995]Chapter 4 で主張される 'Categories & Transformations' 理論に従って構築される、階層つき句構造型の構築物である【それ以外の構築物である可能性は理論上ない!】とすれば、はたしてそれだけで意味の構造と十分にinterface できるのか、という点について重大な疑問が発生する。実際、この疑問は単

に疑問であるに留まらず、チョムスキー流の生成文法（の方法論）に対する根本的な信頼を失墜させるものになっており、同理論が発表された1995年をもってチョムスキーの理論構築の歴史は（失敗裡に）終わったと断言して過言でない。【同理論が *The Minimalist Program* [1995] という著書の中に収録されているという理由で、それを所謂 ‘Minimalist Program’ という理論に包含する論者もいるが、それは同著の Chapter 3 を構成する同名の理論とはまったく別で、或る意味では矛盾対立する理論である。】

チョムスキーの同理論は、初期の変形文法が文の書き換え、すなわち $S \rightarrow NP \quad VP$ といった top-down 式の成分分析の理論だったのと反対に、Lexicon から拾い集めた語彙項目すなわち文成分を Merge (併合) と Move (移動) という操作の適用によって次第に組み上げて節文 (AgrsP、さらには CP) を作る bottom-up 式の理論である。その過程にはもはや D 構造も S 構造もなく、有意味なレベルは PF (音声形式) と LF (論理形式) のみであるとされ、その両者への出発点は、Lexicon から語彙選択 (lexical choice) の操作によって準備された numeration (使用度数つき語彙準備) であるという。それらの語彙項目は最初から格や時制人称活用などを備えている。そしてそれらの形態法上の素性は Move の過程で順次一つずつ照合 (check) され、そのたびに移動履歴鎖 (chain) を形成し、最後に照合された位置がその語の最終確定位置となる。PF と LF は途中まで共通の派生過程を踏むが、或る分岐点【読み出し点 (Spell-Out) と呼ばれる】以後の LF に向けての派生は「潜在的」派生過程と呼ばれ、これがより長くて・それまでの「顕在的」派生過程がより短い方が経済的と見なされる。なぜそうなのかはまったく説明されず、ただ宗教の教義のようにそう宣言されるだけである。「逆の場合がより経済的」と考えてはいけないのか…そういう疑問を抱くことは禁圧される。まさにカルト的・全体主義的な mind control の世界である。この方式で構築される LF は樹形図型の構造しか取り得ないことも明らかである。こうして、2 方向に別れてそれぞれ PF と LF の最終表示に到達した統語的構築物は、それら双方のレベルで完全解釈 (Full Interpretation) を受けるものだけが収束 (converge) し、そうでない (どちらか一方でも収束しない) ものは派生全体が破綻 (crash) する、という。こうして問題は完全解釈のメカニズムへと転嫁されたのである。

さて、以上のように「収束」と「破綻」を対にして表現してしまうと、一見「収束」と「破綻」が半々、とまではいかなくとも、かなりの確率で派生が「収束」するような錯覚を読者に抱かせる。しかし、語彙選択の段階で任意に語彙を拾い集めたのでは、破綻する可能性が限りなく 100% に近く、収束する可能性は限りなく 0 に近い。従って、試行錯誤的に PF と LF を作ってみて、破綻しない派生物だけを適格文として選び残す、といった戦略は実際上使用することができず、実際人間の脳内で起こっている過程ではないと思われる。とすると、人間は語彙選択の段階ですでに、どういう語彙を選択すれば将来派生が収束するかという、しかもどういう概念を構築できるかという青写真のような知識をもっていて、その青写真に基づいて文の派生を実行しているのだ、と考えざるを得ない。そして、その

ようなプログラムは、単に語彙項目の無秩序な集結・準備にすぎない numeration という集合に内蔵されているとは到底思えないのである。だから、そのプログラムを探索して記述することこそ文法家の本務なのであり、未だ得体の知れない「完全解釈規則」などといった名にかこつけて本務を先送りしているのは、卑怯な敵前逃亡であろう。

上述のように、最近のチョムスキー理論ではかつて意味に関与した D 構造を廃止してしまったが、無秩序な numeration にはそれに代わる能力がない。たとえば {I, believe, to, love, him, her} という numeration から I believe him to love her. という文に収束するのか I believe her to love him. という文に収束するのかは、D 構造がなければわからないのである。チョムスキーにとっては《どちらも収束する》とだけ言っていけばすむだろうが、問題は正しい（伝達意図の）L F を選ぶための D 構造に代わる青写真である。それを示せなければ、L F 構築の途中で混線が起こってしまうであろう。こうして結局、チョムスキーの理論構築の歴史そのものが 1995 年に 'crash' したのである。

ここから汲み取るべき教訓は、階層つき句構造そのものを UG（普遍文法）の基礎に据えてはならない、ということである。階層つき句構造はそれと別の青写真から構築されるものであり、その青写真は階層つき句構造によらない基本的な概念構築能力を具えていなければならない。語彙準備は単なる語彙項目の無秩序な集合であってはならず、それらは秩序ある意味の空間において一定の役割を分担し、一定の地位を占めて結束するものでなければならない。その構造を私は 3 次元的節文構造と考えるのであり、それを読み出すための方便が色々な句構造なのだ、ということになる。言語によってはそのような構成素構造にあまり頼らないで 3 次元的構造から直接読み出し（音声化、spell-out）の可能な言語があり、それがいわゆる non-configurational language だということになるが、そのような言語は位相論的な地位関係を反映する種々の文法用具（たとえば格標示や一致の体系）を豊富に具えており、概念構築の過程にも結果にも混線が起こらないように適応している。英語は（そしてたぶん中国語なども）そのような装置が貧弱なために、代償的に句構造が極端に発達したのだ、と言えるかもしれない。後者のような言語を規範とした句構造絶対主義の文法を global standard として信奉すると、心との接触面たる L F もそんな構造をもつしなくなり、それに対応する貧しい心しか扱えなくなってしまう。それでは人間の科学じゃない、という反省が近年の生成文法の衰退に繋がったのである。

2. Gamkrelidze-Ivanovによる印欧語子音体系音韻論について

1984年に発表されたガムクレリーゼとイヴァノフ（Gamkrelidze, T. V. & Ivanov, V. V.）による『印欧語と印欧人』*Индоевропейский язык и индоевропейцы* [第1部]で提起された印欧祖語の子音体系に関する解釈は、そのテーマに関心をもつ人々にとって衝撃的なものであった。従来の閉鎖音のレパートリー b, bh, p; d, dh, t; g, gh, k; g^w, g^wh, k^w というシステムの存在は、もはや手放しでは容認／主張できないものとなっている。それというのは

従来から気づかれていたことであるが、有声の両唇閉鎖音と解釈される b は出現が稀で、起源を祖語の段階にまで遡れるものがない、ということである。また、有標性の高い有声有気音（と解される） bh, dh, gh, g^wh があるのに、より無標的な無声有気音 ph, th, kh, k^h が存在しない、というのも解釈に苦しむ現象である。【そもそも有声有気音というものの音価は不明で、はっきり有声な子音の直後に無声の h が続けば・そしてその直後に母音が続けば、声帯の振動が h によって分断されるから、 $bha-$ といった音群は2音節になってしまう。だから b を囁き音と考え、 h を有声の h と解釈することで辻褄を合わせることになるが、有標性は益々高く、蓋然性は益々低くなる。】

このような難点を G & I は、恰も Gordian knot を一刀両断したという Alexander 大王のように、「声門説」という説によって鮮やかに解決している。この説の骨子は「第 I 系列」の従来 b, d, g と書かれてきた音を、実は声門閉鎖音 $[p^?, t^?, k^?]$ なのだ、と考える点にあり、それに伴って「第 II 系列」と「第 III 系列」の解釈も従来の説と異なってくる。声門閉鎖音というのは、 $[p, t, k]$ それぞれに必要な口腔部位での閉鎖を作るとともに、声門を閉じて、肺からの呼気を遮断した、いわば上部調音器官の密室を作り、次に声門（で閉鎖された喉頭）を上げてその密室の気圧を高め、ついで口腔部位の閉鎖を開放して、貯えた空気を放出する際にできる破裂音であり、当然ながら無声音である。そしてこのような調音に当っては、密室の容積が最大で内部の気圧を高め難い $[p^?]$ が最も困難であり、 $[k^?]$ が最も容易な音となり、従って類型論的・通言語的に見ると声門閉鎖音の中では $[p^?]$ が最も稀な音になるという。この解釈は印欧祖語での生起率とよく整合している。

ついで、そんな「第 I 系列」の解釈と連動して変化する「第 II・第 III 系列」の解釈であるが、G & I は、従来有声有気音とされてきた bh などの第 II 系列は通常の有声音であり、その際 'murmured release' を伴うかどうかは異音の問題と考える。また「第 III 系列」の音は従来通り無声音と考えるが、それが無気か有気かは異音の問題と考えている。これらの話題を扱った論文としては山口巖[1995]『類型学序説』を参照されたい。

ところで、G & I の「声門説」の効用は、従来 of 学説では説明不可能であった、印欧祖語における語根のレパートリー（或いは inventory）を規制する子音の組み合わせの問題に対しても発揮される。というのは、印欧祖語の語根は一般に $C_1e(R)C_2$ のように図式化される。ここで C_1, C_2 は子音であり、 e は $[e]/[o]/\emptyset$ と変化し得る母音であり、 R は有無いずれの場合もあるが「ソナント(sonant)」すなわち鼻音(m, n)/流音(l, r)/半母音(y, w)である。この構造で C_1, C_2 はまったく自由に選べるわけではなく、相互に制約しあっていることが Meillet(, Antoine), Benveniste(, Émile)らによって発見されている。その制約はほぼ三つあるが、まず最初に①第 I 系列の音同士で C_1C_2 を構成することはない、ということ、すなわち旧説の表記では ged, deg のような語根はない。次いで②第 II 系列と第 III 系列は（やはり C_1C_2 として）共存しない。つまり b^het, ked^h のような語根はない。最後に③ $C_1=C_2$ すなわち $g^h eg^h, tet$ のような語根はない、というのである。

以上①、②、③の制約は旧説の音価を信奉している限り解けない謎である。そこでまず以上例示した表示式をG&Iの「声門説」に則って書き替えてみると①' [k'etʰ][tʰekʰ]となる。さらに②' [betʰ][kedʰ]となり、③' [gegʰ][tetʰ]となる。ここで[e]は任意の母音と考えておく。これらの音連続の発音の難易を考えると、なるほど声門閉鎖が近接して出現する①'は発音が難しそうだが、②'のタイプは英語に[kid][dik]など普通に出現し、③'も[did][gæg][pɑp]などごくありふれている。従って②'、③'のタイプに関する限り、類型論的に、或いはlanguage universalの観点から排除することはできない。この問題を解決するには語根をC₁eC₂の形のままで考えていては駄目である。

さきに、語根の中央を占める母音はゼロになることもある、と述べた。もしそうなった場合を考えてみると、語根の実現形はC₁C₂の形を取ることになる。この形では音節をなさないから、便宜上、前後に母音を付けてeC₁C₂eの形を模範形と考え、①' ②' ③'を書き替えてみると、次のようになるであろう：①" [ekʰtʰe][etʰkʰe] ②" [ebte][ekde] ③" [egge][ette]。こう仮定した上で発音の難易を検討してみればよい。

そうすると①"は、①'が困難だった以上に、むしろ不可能と言ったほうがよい。最初の子音を作るために口腔部の閉鎖を開放し、密室に貯えた空気を消費してしまったので、直後の第2の子音を発音するための空気が殆ど残っていないからである。声門を開いて新たに(肺から)空気を補給することは、声門閉鎖音の性格上できない。

次に②"であるが、不可能ではないにしても、このように有声音と無声音が隣接する場合は、同化現象が起こり、有声音だけの連続か無声音だけの連続に変化することが極めて多い — [ebde][eptē][ekte][egde]のように。従って②"の形のままで存続するのは類型論的に、universallyに見てむしろ稀である。

最後に③"であるが、これは重子音(geminate)であるから、発音的には楽である。しかし楽すぎるのも欠点で、二つの(同一)子音の間に如何なる開放(や新しい別の閉鎖)もないから、それらは長子音[g:] [t:]などを経てやがて単一の子音になろうとする強い傾向を発揮する。[egge]→[eg:e]→[ege]; [ette]→[et:e]→[ete]のように。実際、標準平均欧州語の中で、重子音の発音を(綴り字通り)保持しているのはイタリア語とスウェーデン語【後者に似たノルウェー語の事情は筆者は知らない】くらいであり、他の主要な言語は歴史上の重子音を単子音化した。仮に印欧祖語もそうであったとすると、もはやその形は「ゼロ階梯」の標準形eC₁C₂eの形から逸脱しているから、その形式のもつ文法的・意味的な役割を果たすことに支障を来し、遂には廃用になったと推定することができる。つまり、私は語根の「ゼロ階梯」の発現形を、極めて重要な役割を果たしたものと推定し、発音上うまく「ゼロ階梯」になれない、或いはそう聞こえない語根は存続できなかった、と仮定するのである。上記の①" ②" ③"はすべてその条件を満たしている。

以上のように「ゼロ階梯」のcrucialな役割を想定することにより、そこで発生した子音の制約は正常階梯から、更にはC₁eRC₂型の語根にまで類推波及したと考えられる。

3. いわゆる能格についての誤解の問題

かつて月刊『言語』の「言語空間」（読者投稿）欄で、「能格」'ergative'という術語が広く誤解されていることを指摘したことがあったが、その後一向にこの誤解が跡を絶たないので、再び指摘しておきたいと思う。その誤解というのは、どうやら個々の術語使用者の不注意や不勉強に起因するというよりは、英語学という学域または「学門」に属する一部の学者に伝統的に受け継がれてきたもののようで、敢えてそう思うのは権威ある英和大辞典の説明にその誤解が見られるからである。

前回の指摘の際は『研究社新英和大辞典第5版』から引用したが、今回は『小学館ランダムハウス英和大辞典（第2版）』（896ページ）から ergative の説明を見てみる。

ergative adj. 1 【文法】能格の、能格的な。(1)バスク語、エスキモー語や一部のカフカス語に存在する格で、他動詞の主語を表し、自動詞の主語を表す格とは異なる形態をとる。(2)自動詞としても使われる open のような動詞が他動詞として使われた場合に動作主(agent)である主語を指す：例 *She opened the door.*

2 【言語】能格の：自動詞の主語と他動詞の直接目的語が同じ格形態（能格）を持つ言語についていう。

-----n. 【文法】1 能格。2 能格の語。 3 機能と意味が類似している語 [構造]

以上が『ランダムハウス』からの引用であるが、たとえば最後の名詞用法の3の説明は何を意味しているのかさっぱりわからない。それはさておき、形容詞用法の2の説明には明白な誤りがあり、自動詞主語と他動詞目的語が同じ格形態をもつ場合は、それを「絶対格」(absolutive)と呼ぶのであって、能格とは言わない。能格とは、他動詞の能動者を表わす特別の格を絶対格と対比してそう呼ぶのであり、そのことは言語類型学の常識である。そして、そもそも 'ergative' とはもともと言語類型学の用語であるから、他の分野の研究者もその定義に従うのが、「学門」の本家本元に対する礼儀であろう。

さらに奇怪なことに、'ergative' を動詞の種類を指すのに使う人がいる。先ほど出た、自他両用動詞 open などの自動詞用法（にあたる動詞）を「能格動詞」(ergative verb)と呼び、更にそれを含む構文を「能格構文」などと呼ぶ人が、かつてはチョムスキー派の変形文法家に多かったが、依然として、殊に最近隆盛を迎えたラネカー派の認知文法家などに多いのである。これらの動詞は関係文法の用語で「非対格動詞」(unaccusative verb)と呼ばれているから、そう呼ばば言語類型学に対して失礼にならない。ともかく、以上述べたような 'ergative' の誤用を、たとえば博士学位請求者が面接試問の際に言語類型学者である審査教官に対して犯したと想定すると、審査教官の心証を悪くすることは確実で、その辺は厳粛に配慮すべきであろう。

なぜ英語学の世界でこんな誤用がはびこってしまったのか、憶測してみると、英語を母語としている人たちには、その母語のせいで、特に類型学を専攻した人でない限り、能格現象が自分の経験からは想像し難いから、と思われる。たとえばフランス語では使役構文

の中に能格的現象が現れる。Je fais manger les gâteaux à Jean. (私はジャンにお菓子を食べさせる)/ Je fais travailler Jean. (私はジャンを働かせる)の対比では、従属節の他動詞目的語と自動詞主語がともに対格で、また他動詞主語が能格的な与格(à Jean)で現れるからである。尤も、これは能格的ではあるが能格現象そのものではない。フランス語は基本的には対格言語である。しかしフランス語母語話者は母語の文法になぞらえて能格現象を理解することができる。(英語母語話者との)この差は大きい。

それに、フランス国内(ピレネー山地など)で能格言語たるバスク語が話されている。バスク語話者もれっきとしたフランス国民なのだ。従って能格に対する誤解が長く訂正されないままフランス語圏にはびこることはあり得ない。事実、小学館『ロベール仏和大辞典』で *ergatif* の項を引いてみよう。

ergatif 【言語】能格：バスク語、カフカスの諸言語などで、ある種の構文たとえば他動詞能動文の中で積極的な動作主を表す格。名格とは区別される。

【田原註：「名格」とは 'nominatif' (主格) の訳と思われるが、絶対格を指すのかもしれない。おそらく「無標格」とか「辞書形」と解すべきであろう。】と、正しく記述されている。因みに、この *ergatif* の初出は1928年とされており、英語の *ergative* の方は1950年であるから、22年の差がある。これらの語源はギリシャ語 *ergátēs* で、意味は「労働者」であり、*erg-*はゲルマン語の *werk-*と同根である。The door opens (by itself). の意味の中に、どこにworkerや動作主が登場するというのか。まったく正反対の 'ergative' の誤解と言わねばなるまい。動作主を情報化して The door opens by John. とは言えないのだから、むしろ 'anti-ergative' 「反動作主」動詞と呼ぶ方が動詞の名称としてはふさわしい。しかし類似の紛らわしい名称があるから、それにも言及しておきたい。

紛らわしい、というのは、関係文法の術語で「非能格動詞」 'unergative verb' というのがあからである。この言葉は自動詞のうちで「走る」「泳ぐ」「歌う」「踊る」などのように動作主によって制御され、その意志によって選択されるような動作・状態を表現する動詞の下位区分を指している。そうでなく唯一項(主語)が変化の対象で、無生物か、有生物であっても主体の意志では避けることができず、ただ甘受するしかないような状況を表わす自動詞「壊れる」「流れる」「成長する」「病む」「死ぬ」などが既出の「非対格動詞」 'unaccusative verb' である【因みに、'un-accusative' という名称は、これらの動詞の唯一項が意味的にpatientであるにも拘らず、対格(accusative)を付与されないことから来ていると思われる。】。この後者が誤って 'ergative verb' と呼ばれたことがあることは既に述べた。そうしてみると、'unergative verb' という用語は、この誤用の 'ergative verb' に基づいて作られたと思われる。つまり(誤用の) 'ergative verbs' を除いた残りの自動詞群だから 'un-ergative verbs' と呼んだのであろう。従ってこの名称の裏には 'ergative' の誤用の歴史が潜んでいるわけである。これは、関係文法家も犯していた誤用を刻みつけた碑文のような術語であるから、改称するのが望ましいと思う。

4. 日本語動詞の「分詞形／音便て形」の成立について

現代日本語の 書いて・※漕いで・立って・※死んで・買って・※呼んで・※飲んで・取って などは、伝統的な国文法の世界では、いわゆる「文語」すなわち平安時代の京都の（貴族の）方言を標準語すなわち規範として文章を書く際に広く使われた言語の、対応する形式に無理やり還元して、《動詞の連用形+て》が音便によって変化した形、とされてきたものである。これらの「文語」における形はそれぞれ 書いて・※漕ぎて・立ちて・※死にて・買ひて・※呼びて・※飲みて・取りて であるから、それらは前述の公式に合致しており、また時代が下って平家物語などには既に、現代日本語（口語）と同形の語法がぼつぼつ現れる点から見ても、「文語」の形式から「口語」の形式が徐々に発展生成した、というdiachronicな視観が正当な説明原理であると思われる。げんに「サ行5段（四段）」活用に関する「貸す」などの動詞は、「文語」「口語」を通じて 貸して のような形式を取るから、「文語」「口語」の連続性は保証されている。

これに対して、一時期熱病のように蔓延した生成音韻論による解釈もあった。それによれば、前記の 書いて・※漕いで …などは《動詞語根+te》の基底形式から、心の内部にある生成装置においてsynchronicな生成過程を通して産出される、というのである。実際、'tobte' と書いて「飛んで」と読める、とか、甚だしきは、「飛んで」はローマ字表記で'tobte' と書くべきだ、などと主張するとんでもない過激派さえいたのである【因みに、そういう人たちは、現在終止形の語尾は -ruだから「飛ぶ」は'tobru' と書くべきだ、とも主張した】。これらの主張者をとんでも派と呼んでおこう。

しかしとんでも派の説明力は、従って彼らの勢力／信用も、やがて衰退した。それは、前述のサ行5段の動詞による 貸して などの生成が説明できなかったからである。+te の前に来る語根は kas- であるから、生成結果は kasteでなければなるまい。然るに実際現れる形は、語根と接辞との間に-i- を挿入した kasite であり、彼らはそれをうまく（＝説得力ある形で）説明できなかったのである。日本語の表層レベルは開音節言語だから、というのは理屈にならない。それなら tobruの表層形が tobu だったように、kasteの表層形は kase でも kate でもいいではないか、と突っ込まれたら、反論できないからである。いや、そもそも tonde の n の部分は閉音節を作っているではないか。

以上述べた理由によって私は生成音韻論の立場を取らないことにする。そして、やはり「文語」のような古い形から現代語の「音便て形」が派生した、という歴史主義の視観に立つ。ただし、四段（およびナ変）活用動詞の場合、/て/の前の連用形の末尾の母音/i/は、弱くて脱落しやすい母音であり、上二段（一段）活用の語幹末尾の、やや長くて強く安定した母音/i[▼]/とは性格が違っていた、と想定する。そういう意味で、派生の歴史を追求する場合、経過した段階として/tobte/ の形を想定することはあり得る。しかし生成音韻論者と違って、この音韻は歴史上実在の音価をもっていたものとする。彼らのように脳内のsynchronicな生成装置だけに出現する虚構とは考えないのである。

さて、上記の現代日本語の「音便て形」【最近は「分詞形」と呼ぶ学者もある】のうちで※印を付けて示したものは、歴史的な「て」が「で」となって現れるものである。それらの語根を見てみると、 \sqrt{kog} , \sqrt{sin} , \sqrt{yob} , \sqrt{nom} のように有声閉鎖音か鼻子音（当然有声である）で終わっている。これは、印欧祖語音韻論の所でも述べたように一種の同化作用によって説明できるであろうが、「文語」の形からは直接説明できない。なぜなら $/kogite/$, $/sinite/$, $/yobite/$, $/nomite/$ の形では語根と $/te/$ の間に母音が入っているから、それを隔てて同化が起こるとは信じ難いからである。同化を起こすにはやはり2つの音が隣接していなければならない、と考えるべきであろう。とすれば、中間の過程として、生成音韻論とは違った意味ながら、やはり $/kogte/$, $/sinte/$, $/yobte/$, $/nomte/$ のような形を想定せざるを得ない。ただし、 $/te/$ の前の有声子音は1モーラ（拍）の長さをもつと考えるのである。そこで問題はこれらの「有声子音」の音声学的実像の解明になってくる。

ここで「有声子音」は、起源的には必ずしも有声／無声の対立における有声の側を代表する音ではなく、むしろ後倚的 (proclitic) な短い鼻音を伴った子音だったのではないかと仮定してみよう。実はこれは荒唐無稽な空想ではない。東北地方の一部の方言に「本濁音」と「仮濁音」の区別がある言語があり、そこで「仮濁音」は共通語の清音に対応するが、共通語の濁音に相当する箇所に現れるのが「本濁音」であって、 $[^nda]$, $[^mba]$ のような音節を作る。現在NHKのアナウンサーなどに強要されている「鼻濁音」 $[^na]$ などはそのなごり【起源は $[^ga]$ 】と見なすことができる。もしその説が承認されるとしたら、上記の各音韻形は $/ko^ogte/$, $/sin^nte/$, $/yo^mbte/$, $/nom^nte/$ のような形をしていた、と考えるても無理がない。その際、 $/sin^nte/$, $/nom^nte/$ の後倚的鼻音は直前の（1モーラ）鼻子音から供給される。ここから「死んで」の場合は直接 $/sinde/$ が導かれよう。「飲んで」の場合は語根末の $[m]$ が $[t]$ への調音箇所の同化を受けて $[n]$ になったと理解される。

$/yo^mbte/$ の場合は、まず $[^mb]$ が $[m]$ と交替したと考えなくてはならない。しかし「寂し」が $[sa^mbisi]/[samisi]$ の交替形をもつように、それはかつて日本語ではかなり頻繁であったと思われる。もし中間段階として $/yomte/$ が措定できるとしたら、 $/yom^nte/ \rightarrow /yon^nte/$ を経て $/yonde/$ が派生したと考えて無理がない。結局（アクセントの差はさておき）「呼んで」は「読んで」と同じ音韻に収斂するわけである。

さて、ガ行の「漕いで」の場合はすこし厄介である。そしてこれはカ行の「書いて」とも共通しているのであるが、なぜ「イ音便」が発生するかという問題である。実は「イ音便」はかなり広く歴史的な「キ」に起こっている。典型的には形容詞の活用である。現代語の形容詞終止形（／連体形）は「文語」の連体形から来ていると考えられるが、「うつくしき」が「うつくしい」となっているなども説明の厄介な問題である。

先ほど、現代語における有声／無声の対立は古代語では後倚的鼻音の有無に還元されるという仮説を述べた。これはたとえば宮沢賢治などの母語を観察することから得られた仮説であるが、そこで「標準語」の清音に対応する「仮濁音」【音声的には立派な有声音】

を参考資料に取り上げてみよう。そうすると、弁別の特徴は鼻音性の有無であるから、子音の発音、とりわけ後倚的鼻音を伴わない子音の有声／無声の対立は弁別の特徴でなかったことになる。ということは、音素/k/ は場合によっては[g] の発音をもつことも有り得たと考えられる。私は更に、閉鎖が緩んだ摩擦音[r] にもなった、と仮定している。

ところで、軟口蓋子音[k][g][x][r]は後続する母音によってかなり調音位置が変動する。もし「書いて」が「書いて」/kakite/に還元されるとすれば、/-aki-/ の部分の（母音に挟まれた）/k/ は、最も蓋然性の高い音価として、[r] がやや硬口蓋化された[r']を取る と仮定してよいであろう。[kar¹te]は無理なくやがて[kaite] に帰着する。

先ほど「漕いで」は/ko^ogte/に還元できると言ったが、これの祖形が/ko^ogite/ であったとすると、やはり蓋然性の高い音価は[ko^or¹ite] だったのであろう。従って/ko^ogte/には[ko^or¹te] が想定される。この音形から、鼻音性が次第に後へ浸透して鼻母音が発生し、[ko^oi¹te]になったと思われる。こうして発生した鼻母音と[t] との間に後倚的鼻音が発生するのも自然な流れであろう。そうなれば[ko^oi¹te] となるが、それはやがて[koi¹te]となり、[koi¹de]を経て最終的に現代共通語の[koide] になったと考えられる。

以上、先立つ3つの段落で、最も説明の難しい「イ音便」の場合、とりわけ「イ音便」と「て」の濁音化が共存する「ガ行5段」動詞の「音便て形」の発生を説明することができた。残ったものは「タ行」「ハ行（口語では「ワ行）」」「ラ行」の「促音便」の説明であるが、これは比較的簡単である。まず「文語」の形から/te/の前の/i/ が脱落した形を想定する。なぜ脱落するか、たとえば、この/i/ が/tatite/, /kaFite/ のように無声子音に挟まれているために無声化するか、流音/l/ に取り込まれて/tolite/→/tol:te/のように同化されたからである。こうしてできた/tatte/ はそのままであるが、/kaFte/ および/tol:te/は後続の[t] 音に同化されて[katte], [totte] となる。中央の「つまる音」はもと1モーラをなす/ti/, /Fi/, /li/から発祥しているのであるから、その音長を維持して1モーラをもつのは当然である。それは撥（鼻音）音便についても通用する。なお、流音はそれを/r/ と表記しても実体は同じである。

このように1モーラの長さをもち、後続する子音と調音位置が同じ閉鎖音・鼻音をそれぞれ/Q/, /N/ と書くことにすれば、 /taQte/, /siNde/, /kaQte/, /yoNde/, /noNde/, /toQte/となり、これに、複雑な生成過程を経た/kaite/, /koide/ を合わせ、さらに「文語」から変化を受けなかったサ行の/kasite/を付け加えて、すべての「音便て形」（起こらなかった場合も含めて）を説明することができたわけである。

参考文献

- ☆Chomsky, Noam [1995] *The Minimalist Program*. The MIT Press
☆山口 巖[1995] 『類型学序説 — ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』 京都大学学術出版会